転んだ時が起きる時

ある奥さんが、ご主人の一周忌の法事のことで、お寺に来られました。
「早くにご相談しなければと、気になりながら、実は少し前、玄関先で転んで腕を骨折してしまい、車の運転も出来ず、ついつい伸び伸びになってしまいました」とおっしゃるのです。ご主人の死から一年も経たないうちに見舞われた不慮の事故です。

「よりによって、こんな時になんで怪我なんか・・」と、思いがけない災難に、何とも言えないやりきれなさを感じていたことだと思います。まことに心中を察するに余りあるものがあります。

そんな彼女がしみじみと、「お寺の掲示板に書かれている通りですね」と言われるのです。

その時に張り出していた掲示板の言葉は「転んだ時が起きる時」というものでした。

文字通り、心も身体も転んでしまった彼女にとって、この言葉は大きな励みになったようです。おそらく、怪我の順調な回復につれ、「いつまでもクヨクヨしていてはダメだ。何とか立ち直らなければ」という思いが彼女にあったのでしょう。そんな思いに、この言葉が重なり、「転んだ時が起きる時、本当にそうですね」と、頷かれたのだと思います。

ともすれば、転んだことが愚痴や泣きごとの種になり、中々起き上がれないことが多い中、こうして懸命に起き上がろうとする彼女の前向きな姿勢に、頭の下がる思いがしました。

思えば、私どもの人生は、お釈迦さまのお示しの通り、苦悩の絶えたことがありません。一つ問題が解決したかと思えば、また新たな苦悩が生まれてくる。まさに「転んでは起き、起きては転ぶ」人生です。

転びたくて転ぶ人などいませんが、どうしても転んでしまう人生であるならば、その転んだことをどのように受け止めていくか、そこが大事なのです。

もし、転んだことを「災難だった」と受け止めるなら、まずその人の人生から不平不満がやむことはないでしょう。それは、自らが傷つくだけでなく、周りの人も傷つけていく「自損損他」の人生です。
これでは「転んだ時が傷つく時」になってしまいます。

しかし、転んだことを、「自分が成長するための大事な試練なんだ」と、受け止めるなら、転んだことが生きてきます。それは自らを生かすだけでなく、周りの人をも生かす「自利利他」の人生につながります。
掲示板の言葉「転んだ時が起きる時」は、このことを示すものです。

お経には「身自当之、無有代者（身、自らこれに当たる。代わる者あることなし）」と説かれてありますが、私の人生に代理人はいないのです。

辛くても苦しくても、転んだことを自分で背負う以外、誰も代わってくれません。

厳しいようですが、我が身に起こる一切の出来事は、自らまいたタネが芽生えてきたと受けとめていく、それが「業報の世界」と呼ばれる私たちの人生なのです。
だからこそ、転んだことを自らの責任において果たしていかなければいけないのです。
そのことをしっかり腹に据えて、起き上がるのです。
そうすると、思いもよらなかった素晴らしい世界が開けてきます。

それは、こうして愚痴をこぼさず文句を言わず、懸命に起き上がろうとする者を見て、「辛いだろうね、苦しいだろうね。だからこそあなたを捨ててはおけないのですよ」と呼んで下さるお方がいらっしゃるのです。
転んだ痛さを、「分かるよ、分かるよ、忘れられんね」と、共に泣いて下さるお方がいらっしゃるのです。
そのお方が阿弥陀如来と申す仏さまなのです。

そうだったのです。
阿弥陀さまの大悲心と呼ばれるこのお心は、「転んでは起き、起きては転ぶ」苦悩の人生を歩む私のために起こされていたのです。

苦悩の中から立ち上がろうとする者にとって、このお心（大悲心）ほど生きる勇気と安らぎを与えて下さるものはありません。

転んだことをご縁として阿弥陀さまの大悲心に出遭う時、「転んだことが無駄ではなかったなー」と、心の底から思えるようになります。
否、「転んだからこそ大悲心に出遭えたのだ」と、転んだことを恵みとすら受け取ることが出来るのです。

そこに初めて、どんな災難でも乗り越えていく逞しくて尊い人生が恵まれるのです。
それを親鸞聖人は、「念仏者は無碍の一道なり」とおっしゃっています。
すなわち、念仏者はいかなる障害をも障りならない人生を歩むことが出来る、というのです。

「転んでは起き、起きては転ぶ」障害ばかりの人生ですが、こうしてお念仏のみ教えに出遭うことによって「我が人生に障りなし」と、言い切れる世界が必ず開かれてきます。

まさに、お念仏のみ教えはこの人生を正しく見る「智慧の眼」と、いかなる苦難をも乗り越えていく「たくましい足」を与えてくれるものです。

「転んだ時が起きる時」・・・このことを、今一度深く噛みしめたいものです。

平成１５年１０月　　「光明寺だより３０号」より